

いるま9だより

発行

彩の国いきがい大学入間学園

第9期自治会 会報委員会

目次

社会見学	1
若い世代との交流	2
第2回公開学習	2
鉄道博物館：見学	2
学園祭	3-5
自主学習	5
卒業懇談会	6
自治会会長挨拶	6
編集後記	6

入間万燈祭り

撮影：平澤 守



社会見学で学んだ

平成28年10月25日（火）

実行委員長 杉山 孝好

江戸時代の最盛期には衣類の8割が藍染製品だったそうです。その藍染の体験を、最初に訪れた「武州中島紺屋」で行いました。また付帯の「藍染ふる里資料館」では藍の歴史と工程や藍染製品を見学しました。次に「埼玉」の名が生まれた「さきたま古墳公園」を訪れ、稲荷山古墳から出土した国宝「金錯銘鉄剣」や石田三成がその頂上に陣を張った「丸墓山古墳」などを見学しました。最後に、江戸の末期から明治の激動の時代にあって近代日本の産業経済の礎を築いた渋沢栄一翁の記念館とホフマン輪窯（わがま）の残る旧煉瓦施設を訪問しました。埼玉県では、毎年、渋沢栄一賞を健全な企業活動及び社会貢献している経営者に授与していることなど、長い間埼玉県に住んでいても、埼玉のことを何も知らなかったと気付きました。

社会見学で遠い他県に行くことも良いが、今日は私達が住んでいる「ものすごい埼玉」を学ぶことができ、価値ある一日を過ごすことができたのは私だけでしょうか。



丸墓山古墳



ホフマン輪窯内部

一時限目は、黒田基樹教授による講義「大河ドラマ『真田丸』の楽しみ方―時代考証担当の目から―」でした。終始興味深い内容で、大河ドラマの奥深さを痛感いたしました。こうしたキッチリとした次代考証があってこそ、見応えのあるドラマが出来上がる事がよく分かりました。

二時限目は、「異世代コミュニケーションに必要なことは何か」というテーマで若い世代の学生さんとの交流でした。各班に 1 名の学生さんが加わり、活発な討論が行われました。学生さんから就職が内定した喜びや将来への不安、又、家族同居の種々の悩みなど率直な話題が出され、一方、爺婆からそれに応えるアドバイスあり、さながら「人生相談」の趣を持った交流会でした。



第 2 回公開学習(大宮 Sonic-City) 平成 28 年 12 月 26 日（記）石平 逸子、阿部 さち子

第 2 回公開学習は、師走の多忙中の開催でしたが、たくさんの在校生や一般のお客様で満員でした。開会式のあと、第一部「張艶さんによる二胡演奏」があり、哀愁を帯びた美しい音色に魅了されました。第二部は、加来耕三先生の講演「歴史に学び、未来を読む」でした。演壇での歯切れの良いパワフルな口跡が印象的で、歴史小説や大河ドラマへの批判を含め「歴史」「英雄」の捉え方など、今を生きる私たちに歴史から学ぶことの大切さを語っていただきました。第一部、第二部とも、たいへん楽しい時間を過ごすことができました。

施設見学：鉄道博物館

平成 29 年 1 月 25 日

（記）今村 洋一、山越 京子

私たち少年時代にあこがれであった蒸気機関車。青年時代に「輸送力の圧倒的な増強」という使命を持って生まれた新幹線。こうした鉄道の発展史が、高い技術力と共に、日本の近代化を支えた大きな原動力であったことを再認識させられた見学学習でした。「控えめ」に胸をときめかしながら館内に入ったのですが、それはすぐ「興奮」にかわりました。明治・大正ロマンを感じる菊御紋の付いたお召列車やイギリス製の小さな機関車から始まり、戦後大活躍した C57、ブルートレインをけん引していた花形電気機関車 EF66 と続き、学生時代に親しんだこげ茶色の国電までが現れたのです。あちこちから、「これ見たことある!」「これ乗った!」となつかしむ声があがりました。

今回の見学で、「鉄道のレール間隔が、日本ではなぜ効率的な「広軌」(1436mm)ではなく狭軌(1067mm)で始まったのか?」という長年の疑問に、「複雑な地形への対応力、コストの安さ、英国の影響」との回答が得られ納得。ただ、国内最大となるジオラマが閉鎖中(今年夏頃にリニューアルオープン)であったことが非常に残念!! ボランティアガイドの説明もわかりやすく、楽しい夢のような 2 時間でした。



学園祭事業は、私たち2班と6班が担当しました。限られた時間と人員の中で、先ず学園祭参加およびスローガンの募集から準備作業を始めました。次に、プログラムの作成、機材・設備等の手配、会場ホール担当者との打ち合わせ、そして会場ステージの設営等、準備内容を1ステップずつ手探りで確認しながら作業を進めました。こうして全準備作業を、担当班全メンバーの頑張りとお皆さんの協力により無事に終えました。

学園祭当日は、皆さんが創作し練習を積んだ多彩な演技と作品が、素晴らしいステージ発表になりました。まさに全員で学園祭を創ったのです。スローガン「集い・楽しむ・笑顔の仲間」のとおり、会場にはたくさんの笑顔と喜びの表情があふれました。準備や演技練習の段階も含め学園祭を通して、相互交流と親睦をより一層深めることができました。最後にご支援・ご協力を頂いた皆さんに改めて感謝申し上げます。有難うございました。



1班 「クイズと歌で楽しもう」



3班 「手話コーラス」



7班 寸劇「要は力ネ次第」



8班 「みんなで楽しく・・・」



ヨガクラブ 「ヨガ体操」



4・5班 「さくら音頭・八木節」



10班 演奏「ハンドベル」



写経クラブ 読経「般若心経」



9班 朗読劇「泥棒学校」



2・6班 歌と踊り「フォーク・ダンス」

展 示 部 門



花めぐりクラブ



写経クラブ



絵手紙クラブ



ハイキングクラブ



社会科見学



秩父札所巡りクラブ



個人(写真・折り紙)

自主学習

平成29年2月7日

実行委員長 服部 昌樹

「自主学習」は5事業のなかで比較的人気が高く、担当班をじゃんけんで決めることになりました。3班と8班がそれに勝ち担当することになりました。自主学習は2コマを準備しなければなりません。1コマは、「浮世絵の魅力ー北斎」斉藤陽一先生（嘉悦大学客員教授）にすんなり決まりました。残りの1コマは、班員の提案の中から「学生だから試験もあるんだよー」が選ばれました。さてこれからです。試験の内容や仕組みはどうしたらいいのか、皆の意見が収束しません。また問題を皆で作ると、両班全員が「試験」を受けられなくなります。そこで、問題作りのための少人数からなる小委員会を設けることにしました。ここで重要な問題が指摘されました。「委員以外はこの事業にこれ以上に関与できない」ことです。これは二律背反の問題でした。

事業の結果はどうだったでしょうか。班別アンケートによると、「浮世絵」の方は内容・講師ともに全ての班から最上位の評価を貰いました。「試験」の方は「学生時代に戻った」、「久しぶりに緊張した!」と言ったもののや、「班対抗は面白かった」と総じて好意的な感想が得られました。「浮世絵」の斉藤先生に感謝すると同時に紹介してくれました小川さん(3班)に、そして「試験」の問題作成や仕組み作りをしてくれました小委員会の越阪部・奥山・小野寺さん(3班)、武本・芳賀・花島さん(8班)に感謝の意を表します。



卒業懇談会は、4班と5班の合同班が担当することになりました。1学期後半より昨年度先輩の活動結果を参考に計画を立案し、12月20日の理事会に諮りました。その後も1月、2月に実施内容の改善検討を重ねました。懇談会当日は不安もありましたが、担当した班員の準備努力と隠れた才能が発揮され、素晴らしい懇談会になりました。実施に当たり時間スケジュールと司会進行の台本を用意したのが良かったのだと思います。

学園生活の締めくくりとなる行事として、名残と門出の「懇談」と共に、美味しいお菓子やゲームも大いに楽しんで頂けたものと自負しています。特にゲームは、〇×ゲームとジャンケンゲームの2種類が行われ、それぞれの上位勝者に豪華(?)賞品も有って大いに盛り上がりました。出席者全員には参加賞「緊急ホイッスルライト」が用意されました。また、入間学園担当者にも、感謝を込めた贈り物をしました。最後になりましたが、懇談会の計画と実施に尽力されました合同班の皆様及び協力をして頂いた方々に改めて御礼申し上げます。



懇談会会場（いつもの学習室）



内山、田中さん有り難う御座いました

「また逢う日まで」

自治会会長 三浦 幸廣

昨秋、社会見学で訪れた記念館の偉人、渋沢栄一翁の至言に「四十、五十は洩垂れ小僧、六十七十は働き盛り、九十になって迎えが来たら百まで待てと追い返せ」があるようです。

問題は「百歳までどう生きるか」であって翁はそれを指しているはずで、解答例として「**老**人閑居して不善をなす」が浮かびます。君子の「**小**人閑居して不善をなす」のもじりです。他方、入学式で順大・奥村先生がいわれた「マジメはすぐ死ぬ。適度に不良が望ましい」もあります。味わい深い言葉です。二つの金言のどこかに正解がありそうですね。

「入間学園第9期」の誇りを胸に我が道を、しかもマイペースで歩みたいものです。皆様お元気で。

● **編集後記**・初めての編集作業は苦戦の連続でした。発行出来て正直「ホッ」としています。(細田 司郎)

- ・皆違って皆が良い。学友との春夏秋冬。思い出一杯の会報です。皆さま有り難う御座いました。(三河 栄子)
- ・編集に不慣れな私も大変勉強させて頂きました。桜花咲く頃共に学んだ友とのお別れは寂しいです。(山越 京子)
- ・編集作業はおんぶに抱っここの編集委員でした。有り難う御座いました。(阿部 さちこ)
- ・自分は記事を書いただけで楽でしたが、編集は大変。担当者の細田、石谷、雨宮各氏に感謝しています。(今村 洋一)
- ・私は記事を書いただけですが、皆さんの協力のお陰で立派な会報が出来ました。(石平 逸子)
- ・早いもので「あっ」という間の1年でした。仲間としてこれからの人生と一緒に楽しくやりましょう。(藤野 勝)